つれづれ時事寸評26

COVID-19をめぐる日米の対応

本研究所研究員　カーク・マスデン
（日米比較文化論）

問題発覚以前

コロナ感染拡大以前の2019年に、ジョンズ・ホプキンス大学の公衆衛生大学院所属の研究所が195カ国の健康安全保障を評価する「世界健康安全保障指数」を公表した。総合点で１位（83.5点）はアメリカで、日本は21位（59.8点）であった。しかし、その１年後、コロナ感染が拡大した2020年に同大学が公表したダッシュ・ボードで、アメリカは新型コロナウイルス感染者数や死者数で１位という極めて不名誉な結果となった。

このことを受けて、アメリカでは、感染拡大を未然に防ぐことができなかった背景に関する報道が盛んになった。当然、2020年に感染症問題が明確になった後のトランプ政権の対応が槍玉に挙げられたが、2019年以前の感染症対策や組織上の問題も検証の対象となった。例えば、オバマ政権が2016年にトランプ政権にノウハウなどを引き継ぐために、感染症対策に関する69ページに及ぶマニュアルを準備したにもかかわらず、トランプ政権はほとんど参考にしなかったことが明るみに出た。また、2018年に、当時大統領補佐官だったジョン・ボルトンによる感染症対策組織の改変が、組織の弱体化に繋がったとの批判もあった。

私はインターネットを通じてアメリカのニュースをフォローしつつ、同時に日本政府の対応に関するテレビや新聞の報道にも関心を寄せてきた。毎日、複数のニュース番組をチェックしているうちに、アメリカと違って日本では2019年以前のことが取り上げられることがほとんどないことが気になり出した。2011年に、大津波が福島第一原子力発電所を襲ったときには、地震後の対応だけでなく、地震が起きる前から「想定外」だったかどうかに関する議論があったが、新型コロナウイルス対策関連では同様の議論は、ほとんどなかった。

そんな中、2010年に新型インフルエンザ対策総括会議の報告書に関する新聞記事が目にとまった。当時、PCR検査体制の拡充など、今のコロナ対策と密接に関わる提言がなされていたが、その教訓がほとんど活かされてこなかったという趣旨だった。保健所の体制強化が求められていたのに、2010年に494あった保健所の数が2020年には469まで減り、むしろ体制が弱くなっていた。この報告書の作成に関わっていた医師で衆院議員の足立信也氏が2020年５月14日の厚生労働委員会でこうした問題について質問したが、メディアでの扱いは比較的小さかったようだ。

「新型コロナウィルス」という名称

日本ではPCR、mRNA、L452Rなど、コロナ関連でもさまざまな省略語が使用されているが、なぜかWHOが推奨するCOVID-19を使用せずに、「新型コロナウイルス」という表現を使用するケースがほとんどだ。この理

由の一つは、COVID-19という名称が公表される前に、日本政府が名称を「新型コロナウイルス」と法令で定めたからだ。

「新型コロナウイルス」は確かに日本語として馴染みやすいが、ウイルスの種類に関する一般的な説明でしかないところに問題がある。つまり、過去に猛威を奮ったSARSもMERSも、当時は「新型の」コロナウイルスだった。また、COVID-19の収束後にも、次の新型コロナウイルスがいつ台頭してもおかしくない。歴史の流れの中で感染症について語るためには、COVID-19のような個別の名称は欠かせない。政府やメディアが漫然と「新型コロナウイルス」という説明的な語句を正式名称として使い続けていることは、感染症の歴史の中で捉えようとしない場当たり的な認識の表れだと思えてならない。

マスク文化

過去の教訓を軽視して、十分な対策を前もって講じることができなかったことは、日米の政府に共通して見られる問題だ。しかし、それでも日米の感染者数や死亡者数には歴然とした差がある。その原因の一つは、トランプ政権のあまりにも酷い対応にあるだろうが、文化的な要因も重要だと思われる。

100年以上前に、スペイン風邪が流行った際には、日米双方でマスクの使用が重要な感染予防対策となった。アメリカの中では、サンフランシスコ市がマスク使用を義務化したために、東部の都会よりも死者数を抑えることができた。

当時、マスクを使用している国民の写真が残っていることも日米共通の現象だ。しかし、なぜか、その後は双方の国民が大きく異なる道を歩んできた。スペイン風邪の収束後、マスク使用の文化はアメリカの一般国民の間から消え去ったのに対して、日本ではしっかりと根づいた。

こうした文化的な違いは一般国民に限ったことではなく、日米の専門家の間にも見られた。2020年の春、感染が拡大していくなか、アメリカの政府高官は一般人に対してマスクの着用を呼びかけていなかった時期があった。その背景には、パンデミックにおけるマスクの社会的役割に関する専門家自身の認識不足があったようだ。その後、マスク着用の社会的効果が科学的に確認されたとして、遅ればせながらマスク着用が広く呼びかけられるようになった。

マスクには、着用する本人だけでなく、その人の周囲にいる人への感染も防ぐ役割があることは100年前のスペイン風邪の時にすでに証明されていたはずだ。結局、アメリカの専門家でさえも、国民と同様にスペイン風邪の教訓を忘れていたため、新たな研究でマスクの有用性が再確認されるまで適切な指導ができなかったのではないかと思う。

今後、日米双方で、過去から真摯に学び、次の感染症に十分に備えることを切に願う。